その風は天高く突き抜ける

Ｌｉｌａｃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その風は天高く突き抜ける

【Ｎコード】
Ｎ０００７Ｔ

【作者名】
Ｌｉｌａｃ

【あらすじ】
日本帝国に住む西尾司は、普通じゃないかなりドジな１７歳。一番人と違うところはその瞳の色。旅行先で出会った不思議な青年に連れられ、辿り着いた異世界で司は巨大な竜と出会う。これは遠い国のどこかで風に乗る少女のお話…。
かなりよくある単純なファンタジー小説。処女作。

第1章Ｐａｒｔ１（前書き）

ありがちなネタだし、大好きな小説にかなり影響を受けてるので見たことがあるっていうシーンがあるかもしれません…。拙い作品ですが読んでいただけると幸いです。

第1章ｐａｒｔ1

ここは架空の国日本帝国。これはそこに暮らす一人の少女のお話…。

～第一章～司

「司！聞いてる？ちょっと」

司は自分の名前を呼ばれて驚いた。なにしろ授業中に寝ていたところで話しかけられたのだ。

「ねぇ、先生見てるよ」

司は急いで起きてみたものの、

「西尾、ここの答え」

見事先生にあてられ答えも言えず立ち尽くしてしまった。もちろん先生に怒られるし、クラスの皆に笑われた。

情けない笑顔で笑う彼女、西尾司は何処にでもいる女子高生だ。いや、ドジさと食欲は人並み以上の女子高生だ。

そういう女子高生ならこの国に何人かいるかもしれない。しかし、司には徹底的に人と違うところがあった。

それは司の瞳の色だ。司は生まれつき、南国の美しい海の浅瀬のような青緑色の瞳だった。もちろんそんな色の瞳の人はカラーコンタクトとかをつけている場合以外では見つからなかった。

それに司のいる地域では珍しいのだが、彼女の両親はいないのだ。物覚えのつかない小さい頃から司は祖父母と一緒に暮らしてきた。祖父母は司が今の１７歳になるまで一度も両親について話してくれたことがない。

「司！またボーっとしてるよ！そんなんじゃひかれちゃう」

司は我に返って、肩甲骨のあたりまである黒髪を揺らして声のした方向を見た。

そこには司を心配そうに見つめる少女がいた。少しつり目の目もとと綺麗に結ったポニーテールが彼女の気の強さを表している。
「ごめん…考え事しててまたボーっとしちゃった。麻里は面倒見がいいなぁー」
司が麻里と呼んだ少女は小さい頃からの司の親友で、いつもボケッとしている司を注意してくれるしっかり者なのだ。
司の言葉を聞いて、麻里は少し苦笑いをした。何度注意しても司の「症状」は治らないからだ。
「もう…。ねえ司、今度東京に行かない？美帆が秋葉原行くから一緒にどう？ってさ。一泊二日で」
もう高校生とはいえ全てが自由になるわけではない。司は少し考えてから答えた。
「おばあちゃんに相談してみるね」
すると背後から大きな声が聞こえてきた。
「司！麻里！遅れてごめん。先生に呼び出しくらって」
振り向くと男の子のように髪を短くした少女が走ってきた。見るからに快活そうで、明るい茶色の瞳が魅力的だ。
「美帆！今丁度旅行の話してたの。司も相談しといてくれるってさ」
合流した少女は美帆という名前で、とても格好いい。運動ができるし、司はよく知らないがアニメなどが好きらしい。自然と人が集まる性格なのだ。
「秋葉はいいよ。僕はホントに行けることになって嬉しい」
男っぽい口調だがそれが彼女らしく、魅力的だ。
司はまだまだ二人の会話に参加していたかったが、帰り道が違うのでいつも途中で別れなければならない。
「あっ、もうここまで来ちゃった。じゃあね、麻里、美帆」
「相談しといてねー！」
「一緒に行けるといいな！」
二人の友人に別れを告げ、司は帰路を急いだ。

無事、祖父母から心配されながらも出発出来た司は、青緑の瞳の人を探しながらも、まず一日目の東京を楽しんだ。特に、いつもクールな美帆は秋葉原で人が変わったと言っていいほどはしゃいでいた。

二日目、ありきたりな観光名所を巡り、ショッピングを楽しみ、美味しい物を食べ、渋谷の人ごみの中を必死に歩いていると、司は何かに呼ばれている気がしてまたボーっとしてしまった。

ハッと気がついて前を見たときにはもう遅く、目の前を歩く美帆と麻里は目の前から消えていた。慣れない人ごみの中、必死に目を凝らす司だったが、そこに慣れ親しんだ友人達の姿は見えなかった。

『やばい！見失っちゃった！ケータイつながんない…どうして？』

司は見事に迷ってしまったのだった。自分はどこか抜けていると自覚していたつもりだったが、ここまでとは思わなかった。

しかし、何かが呼んでいる気がして、その直感のままに進むことにした。

「なにこれ？なんかよくわかんない。さっきまでもっと広い道だったのに…」

だんだん歩いていくうちに、道は暗く、狭くなっていった。看板がどこの国の言葉でない言葉で書かれていて何が何だか良く分からない。戻ろうと裏を振り返るとそこもまた知らない場所になっていた。

とにかく前に進むしかない。

しばらく歩くと、唯一看板が日本語で書いてある店があった。古い看板だがちゃんと読める。

『はざま雑貨店…なんとか話ができそう。道を訊こう』

そう思って恐る恐るドアを開けると、そこには人魚のミイラとか、ツチノコの剥製とか、妖しいモノばかりが並んでいた。

「すいませーん！誰かいませんか？あのぅ…」

人を呼びながら奥に進んでいくと、後姿の人影が見えてきた。碧い着物と後ろに結った白髪はなんとなく老人を連想したが、返って

きた返事の声は若い男性の声だった。
「はい」
と言いながらこちらを向いたのは、声の通り若い男性で、髪は白く背が高い。
そして何より驚いたのは、彼の切れ長の瞼の下にある瞳の色が、司と同じ澄んだ青緑色だったこと。司は何とも言えない気持ちになった。
「すみません、私迷ってしまってここがどこだか分からないんです。道を教えていただけないでしょうか」
彼はゆっくりとした口調で答えた。
「ここは、異世界と異世界のはざまなんです。ですから迷うと大変なことになります」

第1章ｐａｒｔ１（後書き）

最初の方はあんまりファンタジーじゃないですね…。そのうちぶっ飛んだ話になるので私も頑張りたいと思います。

なんとなく次回予告

謎の青年は頭は大丈夫なのだろうか…？

第1章ｐａｒｔ2（前書き）

変なところで切っちゃってごめんなさい。私はこんな感じで適当です。ゆるゆるです。

ちょっと話がぶっ飛び、ハイスピードで進行します。すみません、私の力量が足りないばかりに…。ついておいでなんて無理無理無理無理無駄無駄無駄無駄ァ！

あ、前回のおさらいをしますね。

「ここは、異世界と異世界のはざまなんです。ですから迷うと大変なことになります」

東京旅行で迷った司が辿り着いた「はざま雑貨店」で出会ったのは、風変わりな青緑色の瞳の男の人だった！

では、読んでください！

第1章part2

「ここは、異世界と異世界のはざまなんです。ですから迷うと大変なことになります」
司のような抜けた人間でも理解しがたい言葉だ。
「はぁ…。私にはよくわかりません」
「これ以外の言葉では説明できませんねぇ。でも、本当のことです。世界には不思議なことがたくさんありますから。ところで、貴女はその瞳の色を不思議に思ったことはありませんか？」
まるで今までの司の悩みや疑問を見透かしているように、彼は笑みを浮かべた。
「…確かにそうですけど。あなたは何か知っているんですか？」
訝る気持ちより好奇心が勝った。
「見ての通り、私もこの瞳ですから。もし貴女の都合がよければ向こうの世界での明日、この瞳の色の理由をお教えしましょう。危害を加えるつもりはございません。多分その日のうちに元の世界に帰ることが出来るでしょう。ちょっと体感時間は長いのですが…」
彼は自らの猫のような瞳孔のある瞳を指差して言った。
旅行は今日までの予定で、帰るつもりだったのだが、司はふと考えた。
『この人は私を知っているの？』
その思いは頭の中で渦を巻いて離れなくなった。長い間謎だった自分の生い立ちが分かるのだ。危害を加えないと彼は言っているし―まぁ、司は人を簡単に信じてしまう性質なので危ないのだが―司は予定を変更してでも話を聞こうと思った。
「来てくださいますか。嬉しいです。ですが、もう向こうの世界ではかなり時間が経ってしまった。友人とはぐれたのでしょう？はざまの出口を教えましょう。そこに友人もいるはずですから」
なぜか彼は、司が彼の提案に同意したことや、友人とはぐれてし

まったことなど、話してもいないことを司の心の中を読んだかのように言ってしまった。
しかし、司は細かいことをあまり考えていられなくなった。
そう、司はこの時ある種のパニックに陥っていて気付かなかった。
自分の人生が大きく、しかもハイスピードで変わることに…。

第1章ｐａｒｔ２（後書き）

微妙な話の切り方をしてしまいました。すいません。
今度こそ…次からはばびゅ～んとぶっ飛んだ話にしますのでよろしくおねがいします。

なんとなく次回予告
ほいほいついていくなんて現代社会ではちょー危ないぜ！でも細かいことは気にしない。だってこれはファンタジーだから。

第2章ｐａｒｔ１（前書き）

第二章は長い！とにかく長い！
こんなんでもお付き合いいただけると嬉しいです。
話が進むの早いですが、あしからず！
あしからずって何？

突然ですが前回のおさらい
妖しい店で出会った妖しいおにいさん。これって危なくない！？
いいのかほいほいついてきて…？
まぁとにかく生い立ちが知りたいからついていっちゃえ、な感じです。

第2章part1

～第二章～エイダ

「今度はちゃんと迷わず帰れると思います。直感で進むのですよ。あっ、私は名前を貴女に言っていませんでした、失礼しました。私はアルバです」
「私は司です」
「司…いい名ですね」
彼は常に笑顔だったが、朗らかそうな表情の下に、悲しみや憎しみを隠しているように見える、と司は思った。でも「来てくださいますか。嬉しいです」という言葉を言った時の彼の表情は晴れ晴れとしていて、本心から喜んでいることがよく分かった。
だから司は、彼は変人ではあるけど悪人ではないという判断をした。

とにかくアルバに言われたように直感で歩いていくと、人通りの多い場所に出た。そして辺りを見回すと見覚えのある顔が…。
「司！探したんだよ！心配したんだから、馬鹿！」
美帆も麻里も二人揃って叫んだ。彼女達の顔は今にも泣きそうになっていた。
「ごめんね、2人とも。心配かけて…」
司は本当に申し訳なく思った。
「大丈夫だったの？」
自分達は田舎で育った。この大都会東京は、華やかな分、恐ろしい場所でもあることを十分覚悟してここに来ているのだ。
「うん、大丈夫だったの。道に迷った時親切にしてくれた人がいたから」
美帆と麻里は眉をひそめた。司のことだから簡単に人を信じたの

だろう、とか、何らかの見返りを求めて親切にしただけじゃないか、と思ったのだ。
疑いの目を向けてくる友人たちにどう説明したらいいか、司は真剣に考えた。自分でも信じられないような話を、さすがに親友に対してでも言うつもりになれなかった。だから司なりに頑張って嘘をついた。
「助けてくれた人ね、私の親戚らしくて、目が私と同じ色だったの。だから皆には先に帰っててほしいんだ。その人と話がしたいから」
親友の二人でも司の瞳の色には気を遣ってしまう。それに司は嘘のつけない馬鹿正直だと思われているので、2人は納得した様子で頷いた。
「なんだ、そういうことだったの。分かった。じゃあ気をつけて帰ってきてね。絶対だよ、約束！」

バスの時間が来て、2人に別れを済ました後、司は祖父母に電話をした。2人ともかなり心配していたが、司がこれまで強く主張したことがなかったので、根負けして気をつけるようにと一言言って電話を切った。司は2人をおじいちゃん、おばあちゃんと呼びながらも本当は血が繋がっていないのではないかと今まで何度も思ってきた。もしかしたら2人が司を強く止めなかったのは、司の親類が見つかるかも、という思いがあったからなのかもしれない。
とにかく、予定外の旅行の延長になったので、泊る所に困った司はネットカフェにいることにした。

朝になって、司はまた感覚で歩き始めた。昨日迷った時と同じように呼ばれている感覚があった。どんどん無我夢中で道を進むと、あの暗い路地に入っていくことができた。
あと少し…。かなり歩いた気がするが、とにかくやっとはざま雑貨店に辿り着いた。
昨日と違い、アルバは外で待っていてくれた。

「早いですね。とは言ってもここでは時間なんて流れないのですがね」
アルバの不思議な発言に首を傾げながら、司は店に入った。埃を被ったソファーに座ってアルバの言葉を待った。
「単刀直入に申し上げます。濁世には沢山の違った世界、異世界があって、ここはそのはざまなんです。ここでは時間が流れない。あ、本題からずれました。で、貴女の故郷はその異世界なんです」
「…異世界ですか？」
信じがたい話だ。でもアルバは普通の顔で（いつも通りの笑顔で）頷いた。
「失礼ながら、私は流れない時の中で水晶を使って貴女の様子を少しばかり見ていたのです。ここに水晶の力を使って貴女を呼び出したのは私。呼ばれていたような気がしたでしょう？」
だから無意識のうちにここに来ていたのだ。
「そういうことだったんですね。私迷ったんだと思ってました」
アルバはすまなそうな顔をして、そして早口に話を続けた。
「貴女は、その異世界にある二つの大国のうちの一つ、アルメリア大帝国の王女としてお生まれになったのです」
司はあまりに唐突すぎて訳が分からなくなってしまった。昨日から異世界とかそういう話は聞いていて、夜にある程度の覚悟はしていたのだが、まさか王女だなんてさすがに予想していなかったのだ。
そして、異世界で生まれたということは…。
「そんな…？じゃあ私を育ててくれた人は…」
今まで何度もそうではないかと思ってきたことだし、覚悟はなんとなくしていたが、やはり悲しいし、寂しい。
「残念なことですが…血は繋がっていないのです」
「そうなんですか…」
どうせいつか知らなければいけなくなる筈だったのだから、司はこれ以上落ち込まないようにしようと努めた。
『真実を知っていきたい。たとえそれが辛く悲しい真実だとしても

…』
　真実はいいことばかりとは限らない。でも、真実を知らないのはもっと良くない。
「ここで一つ提案があるのですが、異世界に行ってみませんか？貴女にやっていただきたいことがあるのです」
　アルバは瞳を輝かせて言った。
「やってほしいことって何ですか？」
　司がそう訊くと、アルバは少し困った顔をした。
「私はあまり詳しくないのではっきりとは言えませんが、貴女にやっていただくのは国の運命を左右することなのです」
「はぁ…？それって私である必要ないんじゃないですか？私がどれだけドジか知ってますか？」
　アルバはドジという言葉にぷっと吹き出したが、きちんと司の質問に答えた。
「すみません…つい…。…貴女でなければ出来ないことなのです」
　笑われた後では説得力がない。なので、司は次の質問の答えで行くか行かないか決めようと思った。
「私が行かなければどうなるんですか？」
　アルバは一瞬口元を下げて、切れ長の目を司にしっかり向けて言った。
「国が滅びます」
　短い言葉だったが内容は重いものだった。
「本当ですか？」
　アルバは無言で頷いた。
　そしてたたみかけるように熱心に喋った。
「異世界に行っても貴女のいた世界の時間は流れません。特別な時計で貴女のいた世界と貴女の今の状態を、このまま記憶しておくことができます。ここに戻ってきたとき、異世界での貴女の記憶も消えません。ちょっと難しいですねぇ…。えーっと今風に言うとせーぶって言うのですかね」

アルバは一通り言い終わると司の瞳を真っ直ぐ見た。アルバの瞳は不思議な光を宿して煌めいている。
「どうでしょうか？国を救ってみませんか？」

その言葉で司は決心した。
「行きましょう！ここまで知ったら後戻りできません」
アルバは、白い歯を見せて笑うと（普段は歯を見せて笑わない）威勢よく言った。
「では、初回限定ご招待！アルメリア大帝国の姫君を、我、帝国一の騎士アルバがいざ御供つかまつらん！」
次の瞬間！足元が青白く光り、急に床がなくなった。
「きゃあ！」
落ちていく2人。すると水のようなものに勢いよく飛び込んだ。
その中は不思議と息苦しくないし、服も髪も濡れない。なにより、とても綺麗だった。
「私の傍を離れてはいけませんよ。ずっとここを彷徨うことになります」
光の渦の中で2人ははぐれそうになった。急いで司はアルバの着物の袖を掴んだ。
周りは色とりどりの光であふれていて綺麗なのだが、ピンと張り詰める緊張感があった。
司が周りを見回していると、周囲の空間が振動し始めた！
「後ろ！あれは何！？」
司が気付いて見つめた先には白銀に光るなにかがあった。
「あれは竜ですね…。竜は簡単に時空を超えてしまう…」
意外とアルバは驚いていなかった。見慣れているのだろうか。しかし司は感動していた。
「綺麗…」
白銀の竜の、長い尾の先まである鱗一つ一つが煌めいている。大きな翼で空間の中を雄大に舞っていた。

感動している司を横目にアルバは呟いた。司には聞こえなかったが。

『貴女の竜が待っている』

白銀の鱗の竜は黄金の瞳を司に向け、一つ咆哮をあげて去って行った…。

第2章ｐａｒｔ１（後書き）

アルバさんかっこつけすぎ…。初期の頃のアルバさんは駄目ですね。
アルバさんは変態…じゃないですよ！大丈夫…。
いつか番外編も載せたいなーなんて思います。それなら心行くまで
変態ですから。それって私も変態ってこと？いいえ私は破廉恥です。

そんなことはどうでもいいからなんとなく次回予告
やっと着いたぜ異世界に！変人と心行くまで異世界旅行の巻〜。

そういえば異世界行こうって言ってどこでも●ア出されても困りま
すね。御供つかまつらんなんて言われたら殴りますね。
アルバさんの言ってることがだんだん意味分かんなくなってしまい
ました。多分色々間違っていると思います。すいません！

第2章ｐａｒｔ2（前書き）

一回第二章ｐａｒｔ2を書いてたんですけど、眠くなっちゃってボーっとしてたら途中のやつ投稿しちゃったんですよね…。すみませんでした。

気を取り直して前回のおさらい
謎のおにいさん、アルバに「そうだ、京都行こう」的なノリで異世界行こうって言われてしまった司。結局、上手く丸め込まれて異世界に行くことになってしまったのだった…。

いまさらですが、前書き、後書きはフィクションです。実際の登場人物、内容とは似て非なるモノなのであしからず。
あしからずって何？

第2章part2

しばらく水のようなモノの中を進んでいくと白い光が見えてきた。その光が目的地へとつながる道なのだろう。期待と不安が司の心の中で渦を巻いた。とうとう来てしまった。意を決して司は白い光の中に飛び込んだ。

一瞬体に強い衝撃が走った。気付けば大きな湖のほとりに辿り着いていた。はざまと、この湖は繋がっていたのだろう。

そして、白い光の向こうには、美しい自然が広がっていた。

「すごい…」

司がそう言った通り、そこには果てしない碧い空、悠然と浮かぶ白い雲、青々とした緑の草原、澄んだ小川が見渡す限りに広がっていて、圧巻の風景だった。

アルバは慣れているのだろうか。この風景に対して無関心そうであった。

「えっと、ここ何もないんですけど、どこに行くんですか？」

建物などの人工物は何もない。

心配そうな顔をする司に、アルバは丁寧に話してくれた。

「これから王都ミエルに向かいます。少し遠いですが心配ありません。今乗り物を呼びますから」

呼ぶといっても何を呼ぶのだろう。

目をぱちくりさせる司をよそに、アルバは指笛を吹いた。

ぴぃぃぃぃぃぃー。

「で？」

今のところ何も起こらない。しーん…。しかしアルバは気にしていない様子。多分大丈夫なのだろう。

何かを待っている間、暇なので、司はふと頭に浮かんだ質問をしてみることにした。

「もしかして魔法とか使えるんですか？」

アルバは一瞬驚いた表情を見せた。
「あ、いいえ。時を止めるときも特別な時計があったから出来たことですし、水晶も水晶自体に力があったから使えたんですよ。これから来るものも、指笛を決まった音で吹けばそのうち来てくれるのです。私は魔法など使えません」
そう言った後、アルバは空を見上げた。相変わらず何も起きない。
すると、上空からバサバサと大きな音が迫ってきた。司は吃驚して上を見た！
「きゃぁあっ！」
司が見上げた先には、天を覆うように広げられた翼をもつ大きな鳥のようなものがいた。鮮やかな群青の羽毛が美しい。よく見れば、鳥とは違い、前足がついている。
「これは人や物を運ぶ獣です。野生はこの国で一番高い山に住んでいるんですが、これは飼育して調教してあるんですよ」
アルバは慣れた様子でその獣に装着された鞍などの準備をしている。しかし司は怖くてなかなか近付くことができなかった。
なにしろ大きいし、猛禽類を彷彿とさせる頭と鋭い瞳が獰猛な雰囲気を漂わせているので怖いのだ。
そんな司を気にせず、アルバは獣の頭を撫でた。
「見た目だけで判断してはいけませんよ。生き物はもちろんですが、人はなおさらです」
司はなんとなくその言葉に含まれているものを感じたのだが、分からなかった。とにかくアルバに手伝ってもらって獣に乗った。
命綱をしっかりとつけて、準備はしっかりできた。アルバは鞍を足で軽くたたいた。それが合図となって獣は空へと舞い上がった。

第2章Part2（後書き）

今回はここで終了です。力尽きそうなので。
また微妙なところで止めちゃいました。すみません…。

アルバさんは謎な人ですね。書いてて楽しいです。

なんとなく次回予告（あくまで予定）
竜？馬？蟹？なんで着物？それと司が異世界に来て、しなければいけないこととは？

忙しくなってきたので更新は遅くなります…。

第2章ｐａｒｔ3（前書き）

なかなか忙しくて更新出来ませんねぇ（，・ω・、）

したいんですがねぇ

暇な合間を縫って作ったので、なんかおかしいかもしれませんが、

生暖かい目で見守ってください

それはさておき前回のおさらい

やってきましたアルメリア！

……終了

前回は短かったですね…

第2章part3

獣が飛び立つと、エレベーターより激しい「内臓をひっぱられる感じ」がした。これはかなり気持ちが悪い。それにどんどん高度が上がっていく。どんな遊園地のアトラクションより不安定で危険だ。

司は必死につかまって目を瞑っているしかなかった。

「姫様？あの、着きましたよ」

気付くと、もう獣は地面に足をつけていた。目の前には煉瓦造りの建物が沢山並んだ大きな都市があった。ここは都市が見渡せる小高い丘だ。多分獣はここまでしか運べないのだろう。都市まではまだ遠く、歩いていくのは酔いでふらふらしている司には辛いことだった。

「もちろん歩いて行くわけではございません。今乗り物を呼びますね」

またアルバは指笛を吹いた。

ピー…。

次は何が来るんだろう…。そう司が思っていると、目の前にアルバが来て、真面目な顔で言った。

「これから城に行ってこの国の王に会いに行きます。つまり、貴女の父君にお会いするのですよ」

そんなことを言われても、司は戸惑うばかりだった。父親のことなど知らずに生きてきたのだから。

司はこれから自分が住むであろう城を見た。多くの人が想像し、憧れるお伽の国の城にそっくりだ。夢じゃないかと疑うけれど、これは本物の世界だ。

司は試しに頬を抓ってみたけれど、夢から醒めることはなかった。痛がる司をアルバが不思議そうに見る。司は笑ってすまし、アルバ

もいつもの笑顔を返してきた。

そうしていると遠くからドスドスッという音が聞こえた。リズムは馬の足音だが、蹄とは違い、地面に鈍く刺さるような音がする。

しばらくすると、遠くに光る何かが見えた。近づいてくると、それは鱗のびっしり生えた…一頭の何かだった。

「何ですか、これ…？」

背中には鞍が付いていて、乗り物だということは分かる…。しかし、ツルツルの鱗に覆われ、首にいたっては、丸くカットしてあるにしても体に刺さりそうな鬣状の棘があるのを見ると恐ろしいとしか言いようがなかった。

黒い目玉は二対あり、両頬の部分からは一対の黒い鞭のような髭？が伸びていた。乗るときはこれを手綱にするのかもしれない。

脚は例えるならば蟹のようになっていて、先は鋭く尖っている。刺されたら、一発でやられるような。

額には緑色の宝石のようなものが付いている。よく見れば、空色の鱗は綺麗かもしれない。アルバが気軽に触っているのを見ていると、司はなんとなく慣れてきたように思えた。

「これは鎧馬です。馬と皆呼びますが、竜の一種です」

そう言われてみれば納得出来るかもしれない。司は恐る恐る近づいてみることにした。

アルバが触っていた鼻面辺りを撫でてみる。鎧馬は意外にも頭を擦り付けてきた。

「わ…」

司は思わず微笑んだ。今まで動物に懐かれなくて、寂しかったからだ。道行く猫には威嚇され、家の近所で飼われている犬には吠えられ、動物園に行くと動物は檻の奥に逃げ…。とにかく動物に懐かれなかった。しかし今確かに動物に懐かれている。見た目では感情を感じられない、触ってみても生き物の温かさもない鎧馬でも、嬉しかった。

「私が乗る鎧馬も来ますので、乗ってみてください」
アルバにそう言われて、司は頑張って乗ろうとした。しかし背の高い鎧馬には簡単には乗れない。見かねたアルバが助けてくれた。長身のアルバは楽々と鎧馬の上へ司を押し上げた。
乗ってみると、普通の馬より細身だが安定している。
「私、馬とか乗れないんですけど！」
司は重要なことを思い出した。乗馬なんてしたことがない。
不安げな司をよそに、アルバは明るい声で言った。
「心配ご無用、ですよ。彼らはよっぽどのことがなければ暴れません」

そのうちに、赤色の鱗の鎧馬がやってきた。アルバは慣れた様子で軽々と乗った。
「本当に大丈夫ですか？」
そう言っている間にも、赤色の鎧馬は歩き始め、司が乗っている空色の鎧馬もつられて歩き始めた。
「大丈夫です。貴女は竜と対等に向き合う『竜姫』ですから」
「…竜姫？」
聞いたことのない言葉に司は困惑した。
「貴女がここに来た理由をお教えしましょう。ここアルメリアは、王制で主に男が王になりますが、実際王に関しては、血筋なんてどうでもいいのです。重要なのは王女の血筋なのです。代々王女は竜姫（りゅうひめ）と呼ばれ、この世界の二つの大陸のうち、こことは違うもう一つの大陸にある、リグリシア・スー王国との戦で竜に乗って戦っていただくのです。ですから獣が貴女を避けるのも、貴女の血筋に潜む竜の力を感じ取ったからでしょう」
アルバはさっきは詳しくないから言えないと言ったくせに、今はすらすらと喋っている。
「戦うだなんて無理です！人を殺すんでしょう？それに竜になんて乗れません！」

アルバはこうして司が反対するのを分かっていたに違いない。今更反対しても、アルバの助けなしでは元の世界に戻れないし、今頼れるのはアルバしかいない。半ば強制的だ。
「貴女が戦わなければ、戦いは長引き、更に多くの人間が死にますよ。それに、貴女の母君もそのまた母君も、この国の王女は皆竜に乗って戦っていらっしゃったのですよ」
返す言葉が見つからず、そしてどうしていいかわからず、司は泣きそうになった。しかし、見知らぬ人の前で泣くわけにはいかないので歯を食いしばって耐えた。
違うことに考えを巡らせようと、これから会うらしい父親のことを考えた。厳しいのか優しいのか…？
『…お母さんは？』
司はふと気がついた。アルバは父親に会うとは言ったけれど、母親に会うとは言っていない。
「アルバさん…私の母親は…」
アルバは数秒間の沈黙の後、きっぱりと言い切った。
「既に他界されております」
司は小さい頃から、親はいないものだと、どこかで思っていた。確かに寂しくはあったが、今の生活が充分楽しかった。
でももしかしたらいるかもしれない、という甘い幻想は失われることはなかった。
今、父親は生きていて、出会える。母親は死んでいて出会えない。複雑な心境と不安が綯い交ぜになって、虚しいばかりだった。
司はとうとう耐えきれなくなって、瞳から涙が零れ落ちた。声を殺して泣いたけれど、アルバは気づいていたかもしれない。泣き止むまでしばらくかかった。しかし、これも知るべき真実だ。
心の虚しさに何をするでもなく馬の背に揺られていると、目の前に街が広がっていた。
人々が往来する様子を見て、司は重要な問題を発見した。
「…言葉って通じるんですか…？」

アルバは司の方に振り返って答えた。
「大丈夫ですよ。無限にある異世界の中で、私が言葉や容姿が似ている世界を探し出し、貴女をその世界に預けたのです。さすがに文字などは違いますが、生活に困るほどではありません」
その言葉を聞いて安心したのもつかの間、司を沢山の視線が貫いた。
「見られていますね…。私もこんな格好ですし」
落ち込んでいる司の気を紛らわそうとしてくれているのか、アルバは呟いた。
司も何か言わないといけないような気にされる…。
「そういえば、何でそんな格好してるんですか？」
「うーん…前に一度日本帝国を見たときに、着ている人が沢山いたので興味を持ったんです。精神統一にも良さそうですし」
確か日本帝国の人々が着物を着ていたのはかなり昔だった気がするが、司は細かいことを気にしている暇はなかった。
周りは白い髪と青緑の目ばかりで、服装は例えるならば、ヨーロッパ中世の服装で、自分はかなり場違いな雰囲気だった。
自分がこの国の住人だということを示す事実は瞳の色だけだった。黒髪も服装も違う。不信感をそのまま表した視線に司は固まってしまったのだ。
それでも鎧馬は前へと進む。人々が自然と道を開けるのは、鎧馬が恐ろしいからかもしれない。街を見渡しても鎧馬は見当たらない。きっと鎧馬は戦に使ったり、高貴な人が乗ったりする生き物なのだろう。
そんなことをぼんやり考えていると、城が目の前に迫ってきた。石造りの壮大な城…司はその威圧感に押しつぶされそうだった。
これからのことを考えると、不安しかなかった。

第2章ｐａｒｔ３（後書き）

やっと話の本質が見えてきました！

この調子でちょくちょく頑張ります！

何となく次回予告（予定は未定）

お城のセレブ生活は最高だね！

……終了。

第2章ｐａｒｔ４（前書き）

久しぶりの投稿となりました
すみません…何故かパソコンの小説家になろうが開かなくて…

というのはただの言い訳です
忙しいです最近
これからやる気だして頑張ります…

土下座しながら前回のおさらい

この世界で自らのやるべきことを知らされた司…
竜と共に戦う竜姫の役目は自分には重すぎると司は思うのだった

そして何故着物なんだいアルバさん

第2章part4

アルバは慣れた様子で馬から降り、それから司を降ろしてくれた。城門を護る兵士たちを見ると、司を怪しんでもいるし…アルバとは目を合わせようとしない。しかしそれでもアルバは気にせずに、兵士に馬を預け話しかけた。

「急用だ。通せ」

アルバは決して冷たく言ったわけではないし、いつもの笑顔だったが、兵士たちはどこか怯えていた。それで司は少し戸惑ったが、アルバに手をひかれて城の中へと入ってしまった。後ろを振り向くとため息をつく兵士たちが見えたが、大きな扉が遮ってそれ以上は見ていられなかった。

「これから王と面会していただきます。…おっと、貴女の生まれたときに名づけられたお名前…言っておくのを忘れていました。誠に申し訳ございません。『エイダ』が貴方のお名前です」

今言われても困る…と司は言いそうになったがこらえた。なぜなら周囲はもう歴史ある雰囲気に包まれて白亜の壁や天井、大きなステンドグラス、煌びやかなシャンデリア等が惜しげもなく散らばる厳かな、何か言葉を発するのさえためらわれるような世界になってしまったからだ。

『私は本来こんなところで生きる人間だったわけ！？本当に私なの？お城も名前も全部私には合わないよ！』

司は立ち尽くしたい、逃げ出したいという気持ちでいっぱいだったが、唯一の頼れる人、アルバはどんどん前へと進んでいく。いくつもの廊下や階段を通る際、使用人らしき人々に遇って、急いでアルバの後ろに隠れてやり過ごした。

司がさすがにそわそわしながら進むのもうんざりしてきたころ、アルバの歩みがゆっくりになってきた。するとアルバは大きな扉の

前で立ち止まり、そこにいた兵士に小声で話しかけた。
兵士は驚いた顔をして司を一瞬見たが、扉を開けて中へと入っていった。待つ時間はかなりあるらしくアルバは壁に寄り掛かって話しだした。
「ここが王の謁見の間です。本当は服装を直しておきたかったんですが、王様も多忙でいらっしゃいますので仕方がありませんね」
しばらくして、ゆっくりと扉が開かれた。紅い絨毯が敷かれた床を緊張しながら歩く。周りには大臣らしき人が沢山いて、探るような目で司やアルバを見つめていた。玉座に座っているのは眉間に深い皺の刻まれた５０代ほどの男の人だ。厳格さを絵に描いたような顔をしていて、素晴らしい王ではありそうな気がしたが、司の思い描いたような理想の父親のイメージとはかけ離れていた。
ある程度まで部屋を進むと、アルバは跪き、頭を下げた。司はどうしていいか分からず、一応頭を下げるだけにしておいた。
「急に呼び出すとは、それほど重要な話なのだろうな？」
威厳のある低い声で王は尋ねた。
「ええ。異界でお守りしていたエイダ姫が、水晶の力の及ぶ範囲にやっと入って来られたので、お連れしてきた次第でございます」
それを聞いた王はさらに眉間に皺を寄せた。
「確かに瞳は我等の世界の住人と同じ青緑色だが、髪は黒いし、妙な服も着ているではないか。このような者が真にわが娘だと言うのか？」
その言葉に司はムッとしたが、アルバは涼しい顔で返した。
「髪の黒さはここに住んでいれば治るでしょう。それに私がずっと見守ってきたのです。間違いありません」
王は未だに信じていない様子だった。
「それでもお信じにならないようなら、竜に訊けばよいでしょう。竜なら全てが分かるはずです。…もし本物でなかったのなら彼女は安全に元の世界にお返しし、私には斬首の刑でも科してください」
アルバはそんなことをいつもの笑顔で言い放った。

すると王も苦笑する。
「何をしても死なないくせによく言うわ」
一瞬場に冷たい空気が流れた気がした。しかし司には2人の言っていることがよく分からなかった。周りの大臣たちはひそひそと何かを話している…。それでもアルバは笑顔だ。王はため息をつき、言った。
「ここでそなたと話していてもキリがない…竜に訊くしかないであろう。私も付き合おう」
王は立ち上がり、皆が移動を始めた。

移動中は誰も話をしなかった。司がまだエイダ姫という確実な証拠がないため、司に話しかけてくる人もいなかった。
城を出てしばらく歩くと、かなり大きな建物が目に入ってきた。竜舎という建物です、とアルバが司に小声で伝えた。建物はかなり古ぼけた雰囲気はあったが、頑丈そうだった。扉も大きくて兵士10人程でやっと開けることのできるものだった。このなかにいる竜はさぞかし大きくて強いのだろうと司は思った。
中に入ると、まさに動物という感じの臭いが充満していた。辺りは薄暗く、目が慣れるのに時間がかかった。
やっと目が慣れてくると、大きな檻のなかに、大地の底から響いてくるような呼吸をする大きな塊が見えた。
『これが…竜…』
大きな塊…竜はゆっくりと頭を上げこちらを見た。
司を見つめるその瞳は、暗闇でも蜂蜜のように輝く黄金で、猫のような瞳孔が鋭い視線を強調した。そして、体を覆う重厚な鱗は深い緑色だった。
瞳を正面から見つめるのはとても怖いし、緊張することで、司は思わず目をそらせてしまった。
するとどこからか、よく響く女性の声がした。

『恐れる必要はない。こんなに小さく、肉のついていない人間など食いたくはないからな』

少ししわがれた深みのある声…。司の頭の中から響いているような気がした。

第2章ｐａｒｔ４（後書き）

睡魔と戦いながら頑張りました…
アルバさん変人ｗｗ

竜登場しますよ
お楽しみに…

なるべく早くアップしたい…

眠い…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0007t/

その風は天高く突き抜ける

2011年9月1日03時23分発行